土呂久からの便り

現われた強力な味方

日弁連調査団や、進む自主検診

宮崎・高千穂　吉村　宜博

ごぶさたしています。

こちら土呂久では、九月日弁連（日本弁護士連盟？）の調査団が訪れ、被害者の声を聞き、町の行政対策について調査を行い、その後県、福岡鉱山保安監督局、環境庁の調査をするなど、被害者の立場に立って活動しています。

さらに十月には岡山大学を中心とした医師団による自主検診、予想を上まわる百十八名が受診するなど、行政・医療の両面で強力な味方が得られました。

日弁連の調査団は、「ズリ対策」「医療対策」「認定基準の問題」「補償問題」などの諸点を鋭く追及しました。

現在のズリ対策は、ズリ（鉱災）を平坦にならし、そのうえに並土をかぶせただけ。医療対策は、認定のため、県が年に一度検診を行うのみで、被害者の健康状態を十分把握していず、今年四人も亡くなっている。認定基準には、依然内臓関係が含まれていず、国の認定基準一点張りで、枠を広げようとする積極的な姿勢が見受けられず、補償に至っては、被害者を分断し、個室に閉じこめて説得や泣き落とし戦術で低額補償を押しつけ、第二次補償交渉では、公害審査会の出したあっせん額の上限より十万円も下まわる額を押しつけるなど――このような結果となっています。

自主検診でわかりましたが、現在の認定基準ではかなりのとりこぼしがあり、明らかに公害病疑いないと思われる人が認定を受けられず、特に重金属による白ろう病症状が多数見受けられました。

今月下旬に、第三次保償交渉が行われる予定ですが、県は①被害者から出された要求（一律一千六百万円）を補償すること。②あっせんに当たっては代理人（弁護士・守る会代表）を認めること。③月七万円の生活費を補償すること――をつっぱね、今までどおりの企業サイドに立ったあっせんを行おうとしています。

先日被害者と、社会党県議、守る会会長との話し合いでは、あっせん交渉の是非は、日弁連、自主検診団の動向をあくまで見つめながら考える、ことに意志統一しましたが、その後被害者の間から足並みの崩れが見られ、要求を撤回して再び知事にあっせんを委任する人が出て来ました。問題点をかかえての闘争だといえます。

公社内でも、職業病が見られます。

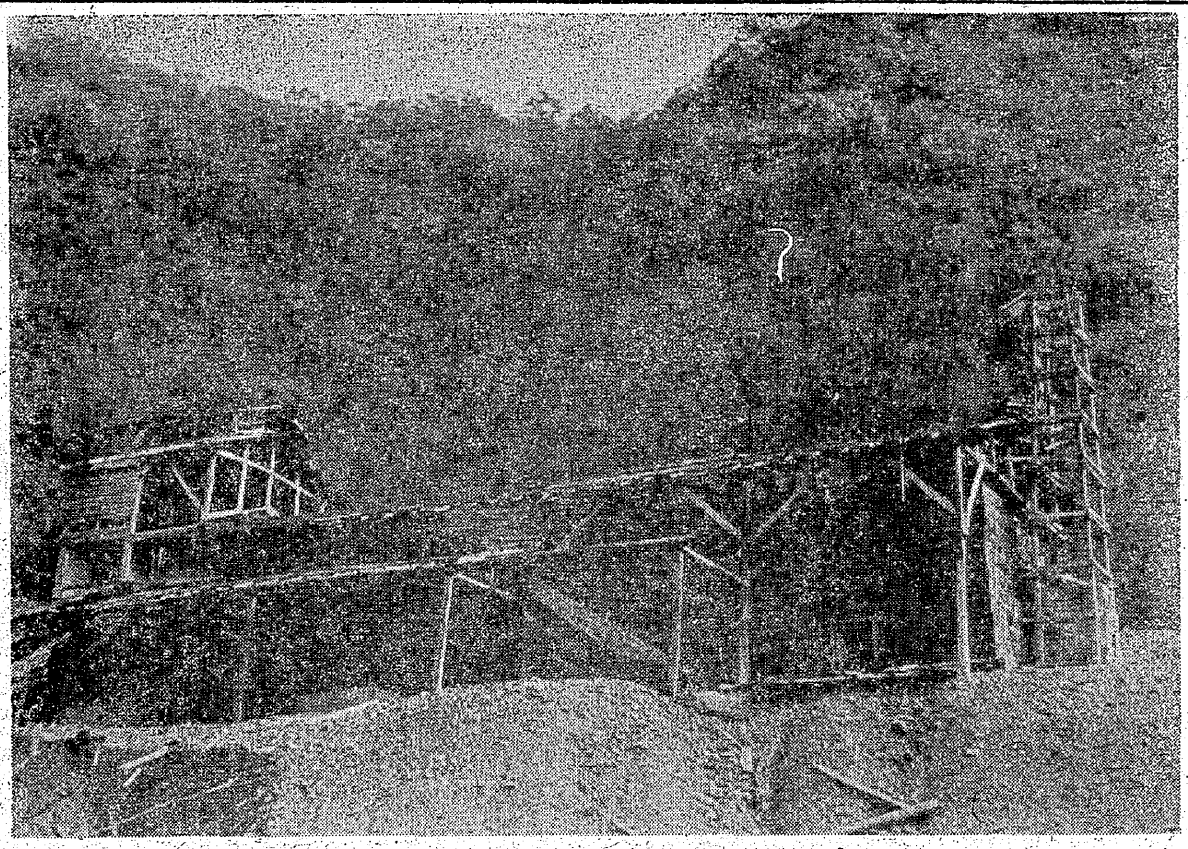
職業病は資本の合理化による矛盾のひとつで、極度の疲労の蓄積によって起るもので、疲労が回復しないうちに交換作業をつづけるといよいよ治りにくくなり、悪化してゆくんだと話しています。現に、女性組合員の話を聞くと、肩こりの人が非常に多いことにおどろかされます。

私たちはこれらの実態を社青同の班会議の中で出し合い、これまで「反合理化闘争」がスローガンだけに終っていた点を反省し、今後は企業内外で、一人の被害者も出さないために学習、教宣活動、さらに調査活動を強化してゆくことにしました。

三池の皆さん、寒くなりますが健康に注意して闘ってください。

×

吉村さんは、全電通高千穂分会の活動家で、荒尾市のご出身です。連絡先は「宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井、全電通高千穂分会」です。こんど吉村さんから「COカンパ」として、多額のご芳志をいただきました。心からお礼を申しあげましょう。



写真は亜ヒ酸焼きガマ。昭和37年閉山後放置され、46年に福岡鉱山保安局の指示でこわされたが、そのときなんと、2トンものヒ素が付着していたという。

釣り大会の記

頑張る、青年部OB

去る十一月三日、青年部OB（井上文雄、桃島敬三、月野貞信氏）の呼びかけで、青年部OB、一般組合員を含め総勢二十余名で八丁牟田でヘラぶな釣り大会を開いた。

その日は、午前七時十分全員集合。さあ、出発だ。

八丁牟田の釣り場は広く、クリークが到るところに拡がり、みんな、それぞれの釣り場に散る。

私の釣り場は、田島さん、松崎さん、桃島さん、松本さんと五人き」、と田島さんの声があがる。声の方に目をやる。なんのことはない、釣り糸を樹木に引っかけ悪戦苦闘。みんなクスクスと笑いこける。

時計の針が十二時を指す。松崎さんが、断然他を引き離してトップ。私は成果なくグロッキー。

「他の連中はどうやろうか」、「今日は誰れも、かんばしくないばい」と、声をかけ合い、それでも釣りにはげむ。

突然、田島さんの釣竿が弓なりに張る。「こら、大物ばい」。田島さんのはずむ声。まわりも興奮する。釣竿を一生懸命引き上げるが突然バリッとにぶい音と同時に竿が折れ、田島さんの気持を振り切るように、大物賞候補は水中深く姿をくらます。残念そうな余いんがただよう。

午後二時、釣る時間はあとわずか。私は成果なく気持はあせる。私の気持を慰めるかのように、ウキがピクピク動く。と同時に、竿を引き上げる。釣糸の先に、強い太陽の光を受け、ギラギラとふなが踊る。私の第一号のふなが釣り上げられたのだ。その時の気持は、昨年七月、採炭工三十四名配転反対闘争で白紙撤回を勝ちとった時の気持に通じ、ときの声があがった。

さあ、計量の時間だ。楽しい顔。不満足な顔。疲労の顔。誰れからともなく、「森山さんが大量賞ばい」。森山さんが「古賀さんがいるから」と、めいめい釣りの模様を話す。

計量の結果、大漁賞、大物賞とも古賀さん（三川）だった。

（この項中原一）

さあ、だれが大漁賞をとるかな？

秋たけ

秋たけなわ。結婚シーズンをむかえ、各地の結婚式場は大繁昌である。

昔の花嫁さんは文金高島田に黒の留め袖姿で、家と家との結婚のため、喜びの中にも嫁して再び帰らず、という半ば悲壮な決意を秘めていたように思われた。虚礼廃止、生活改善、結婚の簡素化とはいつの頃の話だったっけ。

今はどうだろう。一生に一度の花嫁姿。より美しく、よりはなやかに着飾りたい娘心。またそうしてやりたい親心。

貸し衣裳屋さんは、次から次に豪華な物を作り出す。あまりにも衣裳が上等すぎて、出来上がった花嫁さんはほんとうに美しく、そして人形のように無表情で、生き生きとしたところが感じられないのは私だけであろうか。

披露宴では、二度もお色直しとか。喜びごとではいえ、まるで着物のファッションショーみたいで、花嫁さんはさぞお疲れのことだろう。

最近娘さんを嫁がせた知人の話では、結婚費用締めて二百万円也、とのこと。年頃の娘を持つ親として、ぞっとする話である。

結婚は、たとえ式を挙げなくても、婚姻届を役所に出せば成立するというものの、やはり親しい人たちに結婚を披露し、また祝福され、本人たちも結婚生活への決意を固めるためには、やはり結婚式は意義のあることである。しかし結婚式はピンからキリまで、さまざまである。

主婦会の先輩であるFさんの一人娘K子さんは、短大を出て（三池労組のF氏は、差別低賃金の苦しい中で、大学へ通わせずも、みんなお友だちの人たちが心をこめて作った手料理だったそうな。

スピーチが始まる。花嫁さんの番がきた。ベールをかぶったK子さんは立ち上がって――

「私の父は、三池炭鉱の労働者として三十数年間、停年になるまで、炭鉱の坑内で、真っ黒になって働き、私たちのためんばりました。私は、そんな父を心から尊敬しています」。

だれおくするところなく、立派に挨拶をしてくれたとFさんから話しを聞いたとき、「この親にしてこの子あり、さすが三池の娘だ」、胸がジーンとなり涙がこぼれそうで、「K子さんほんとにおめでとう。いつまでもきっと幸せにネ」、と心の底から祈らずにはいられなかった。

後日、当日の写真を見せてもらった。花束を持ち、純白のウエディングドレスに包まれ、愛する花むこさんに寄りそい、仲間に囲まれ、うれしそうなK子さんは、ほんとうに美しく、幸せそのもので、すばらしい花嫁さんであった。

×

どうかこの欄へ、素晴らしいご投稿を。

花嫁さんのこと

宮浦　伊牟田瑞枝